

味な街

連載21

美味しいお酒と肴のお店

「すまらん」

料亭、割烹、小料理屋、居酒屋などの呼称には、それぞれ厳密に一線を画す区別があるのかと思うことがあるが、「すまらん」はいずれの特徴をも持ち合わせた店である。間口二間余りの店に入ると、上がり框に続いて八席の和風カウンター。畳から床下に足を伸ばせる掘り炬燵式で、カップルや勤

若者で賑わうトウエースの路地にひっそりとある「すまらん」は、まさに穴場といった風情。左が女将の岸本カツ子さん、右が筆者

私にとって「すまらん」の料理は京都のお番菜を思わせる。昔から京都には何の日に何をたべるといふきまりがあつて、私の実家（*）では文政年間からの慣例で朔日には身欠鰯と刻み昆布をたき、八のつく日はあらめと揚げの煮物、十五日は小豆飯といもぼう、月末はおから。昼の番菜は焼豆腐と揚げの夫婦だきとか鰯と茄子の煮物等であつた。面倒なようだがその日はそれで済むので女は余分な気を使わずにすむし、乾魚とか豆や海草等、ヨードやミネラル、蛋白質がとれる生活の知恵と言える。お番菜の番は常のモノという意味で番茶や番傘と言うが如し。素朴な材料に手間暇かけて仕上げた伝統

の味はコンビニのマニュアル式クッキングとは一味ちがつて、いつ食べても何度食べても飽きることのない、しみじみした庶民の生活の味なのだと思う。そこで私は「すまらん」の料理を兵庫のお番菜料理とよんでいる。今は亡き土井勝さんが「野菜料理の上手な人は本当に料理ができる人ですよ」と言っておられたが、水と気候と風土がよい野菜を生み出し、その点兵庫は恵まれた土地で特に「すまらん」は朝掘りの野菜を素材として、四季を通じて真正銘の旬の味が楽しめる贅沢な店である。この店で私はずいきの煮物に夏の到来を感じ、無蒸しが出始めると木枯らしの季節の近きを知り、時の移ろいの中に益を傾ける。

此の店の女将は早朝から畠の手入れや水やりをすませ昼には魚の仕入れ、三時に店の支度を始めて五時に客を迎える。就寝は午前二時。四反の田畠や山林もあり料理が生業という訳でもないのに敢えてしんどい目をするのは、「私はいろんな人と会えるのが好き」だから、「その日の突き出しを用意している時もお客の顔を思い浮かべながら一生懸命つくる」と言う。まさに「此の月、此の日、客を迎えるする菜は此の一回をおいて他になし」という一期一会の心に通じるものがある。「すまらん」が年に一度、高級料亭になる時がある。松葉がにの季節、郷里



ずりり並んだお番菜の野菜はすべて自家製、魚介も女将の眼鏡にかなったものだけだ。丸かわはぎは煮つけも格別だが、薄造りもまたこの上ない美味

「すまらん」

神戸市中央区下山手通3-2-7
TEL.078-321-1313
17:00~23:00 日祝休
地酒（一合）600円～
一品料理500円～

*京都の老舗料亭「なかもら」（編集部注）

長崎

愛すべき人と街

ぶらりぶらり

紀行

博多から長崎に向かう特急「かもめ」の車内で、なかにし礼の『長崎ぶらりぶらり』を読み終えた。長崎。そのイメージは、日本三大祭りのひとつ「長崎くんち」、グラバー園、異国情緒あふれる洋館、教会、原爆、そして遠く南の端の外国への窓。今回の旅では、そうしたものとまた別に、長崎を「歩く」ことによって、長崎に住む「人」に出会えた、それは大きな発見だった。

ちゃんぽん発祥の店「四海楼」の裏手に、旧香港上海銀行長崎支店記念館がある。長崎にあるおよそ70の洋館のなかで、もっとも大きなものである。かつての神戸東亜ホテルを手掛けた建築家・下田菊太郎が設計、欧風式の建物に和風の屋根の「帝冠併合式」という情緒ある建物だ。区画整備から一時は取り壊しが決まったものの、市民10万人の署名が集まり中止になった。また、鎖国時代には唯一の外国への窓であった出島は、資料館として街並みが復元されている。その復元費用10億円近くは、市民の募金によって集まったものであ

る。長崎は、自分の街の誇りを自分たちで守ろうとする「人」の力が大きい。

『長崎ぶらりぶらり』の主人公、芸と歌に人生をかけた芸者・愛八が生きた花街「丸山」を歩いた。その昔、多くの男性諸氏が「花街に行くか行くまいか」と思案したという「思案橋」跡を通り、「梅園身代わり天満宮」へと進む。元禄の時代、身代わりとなって切られた天神を奉ったという天神には、戦争中、丸山町の出兵兵士らが皆この神社にお参りし、そのほとんどが無事に帰還したという。『長崎ぶらりぶらり』の中でも、愛八が、肺病の子どものために神社でお百度を踏み、結果的に身代わりとなる。

「由緒ある寺ですが、維持管理がむずかしく廃れる一方でしたが、ぶらりぶらりのおかげで参拝客も増えました。なかにし礼先生が身代わりになって天神さまを救ってくれたのでは」と、長崎史談会会員で料亭「青柳」の若旦那である山口広助さん。そして、史跡料亭「花月」。日本で最初に作ら

れた洋間、坂本龍馬が酔ってつけたという刀傷の残る柱、シーボルトの妻・タキの部屋、原爆の爆風で曲がった柱。「さまざまな時代を過ごした料亭です」と、女将は話す。長崎は、それぞれの時代の激動の波をかぶってきた街だ。印象的な言葉があった。しつぽく料理で有名な「矢太楼」のおかつつあま（大女将）が言った言葉だ。

「長崎の女性は働くことが好きなんです」長崎くんち（長崎では「おくくんち」という）では、長崎の男がその腕を見せる。いったん引き下がっても、「もってこーい」という観客のかけ声とともに祝いの船や龍船を引き回し、ぶらぶらになるまで帰してもらえないという。

男は勇壮に、大らかに、女は繊細に、腰を据え、揺れる時代に生きてきた、それが長崎の「人」なのだろう。ぶらり、ぶらりと長崎を歩き、この地の人と接し、愛すべき日本の地がまたひとつ増えた。

（鳥羽）

●取材協力／長崎市観光部観光宣伝課



ベイサイドにある「ながさき阿蘭陀年」のメイン会場。停泊しているのは唐船「飛帆（フェイファン）」の復元。来年のNHK大河ドラマにも登場する



「ながさき阿蘭陀年」のガイドさん。日蘭交流400周年を記念し来年3月まで、長崎市内各地でさまざまなイベントが行われる



元禄6年、安田次右衛門が何者かに刺されたものの、天神様が身代わりとなって血を流してくれたことから奉られた「梅園身代わり天満宮」



「梅園身代わり天満宮」で説明をしてくれた長崎史談会の山口さん。本殿の天井には奉納された書が並ぶ

長崎市が長期復元計画を進める「出島」。現在は史料館等が整備され、鎖国時代に近代化の窓として賑わった地の面影がよみがえっている



「矢太楼」の女将（おかつあま）は、今年80歳。「久しぶりに着物を着たので」ということだがやはり美しい



↓「花月」の部屋からは有名な庭園が見渡せる。窓ガラスはうすく伸ばしたビードロだとか。右側には坂本龍馬がつけたという柱傷のある床の間が見える（「花月」での食事は前日までに変更予約）
・史料科亭「花月」の女将は、老舗の料亭の貴婦人と、女性のあたたかさを感じさせてくれた



花街からの帰り道、末練から振り返りつつこの下を通ったという「見返り柳」。左はカステラで有名な「福砂屋」本店

MUSIC X'mas JAZZ NIGHT2000 **伊藤君子&小曾根真 SPECIAL GROUP TOUR 2000**

先日スイングジャーナル誌でゴールデンディスク賞を受賞、今や実力・人気ともにナンバー1のジャズ・ボーカリストと称される伊藤君子と、彼女のニューアルバム「KIMIKO」にも参加している神戸出身のジャズ・ピアニスト小曾根真のクリスマスコンサート。クリス・ミン・ドーキー (b.)、クラレンス・ベン (dr.)を迎え、豪華で熱い夜を演出する。



伊藤君子&小曾根真

12/17 (日) 17:30開場 18:30開演
神戸新聞松方ホール (ハーバーランド神戸文化情報ビル4F)
前売一般5000円 当日5500円
甲陽サウンス、チケットぴあ、ローソンチケット他で発売中
甲陽サウンス ☎078-882-1574

MUSIC 高木綾子フルートリサイタル

フルートによるユーミンの楽曲とクラシックのアルバムを同時リリースしてデビューした、話題の新星、高木綾子。'97年の神戸国際コンクールで奨励賞を受賞したとあって、神戸は彼女にとって思い入れもひとしおの地。「いい音楽はいい音楽」と、ポップス、クラシックのジャンルを超えた個性あふれる音色を聴かせる。

チケットプレゼント



セクシーな唇からこぼれるのは独特の重厚な音色

1/14 (日) 14:00開場 15:00開演
神戸新聞松方ホール (ハーバーランド神戸文化情報ビル4F)
S席3800円 A席3300円 (当日+400円)
チケットぴあ、他市内の主要プレイガイドで発売中
神戸新聞松方ホール ☎078-362-7191

PLAY 前田敏郎オリジナル朗読劇〜POETIC SYMPHONY〜
"Last Christmas Eve"

劇団青年座出身の前田敏郎が作・演出・出演するオリジナル朗読劇「POETIC SYMPHONY」は今回で3回となり、彼独自の世界を創るライフワークとなっている。恋人を失い、過去にとらわれ前を向くことを忘れた彼女に、神はどんな贈り物を与えてくれるのだろうか? 20世紀最後のクリスマスに、あなたの心に愛の灯がともされる…。



神戸出身の前田敏郎

12/21 (木) 20:00開演 22 (金) 17:00/20:00開演
23 (土) 13:00/16:00/19:00開演
バラディアーム (北野異人館倶楽部パートⅡ2F)
前売3000円 当日3200円
チケット/ガンバ・インフォメーション ☎03-3477-8676

ART DESIGN21
哲学する生活デザイン 60カ国260人の若手デザイナーの作品展

「ファッション」という世界共通の言語を介して文化的多様性を高め合い、地球市民としての意識を広げていこうというプロジェクト「DESIGN21」。その過去3回の全入選作品を展示する。世界60カ国の若手デザイナーたちが、時代・国境を越えて、ひとりひとりの哲学を通して、次の世紀に求めるべき生活デザインを提案してきた作品群。



世界60カ国260人の若手デザイナーが生活デザインを提案

~1/23 (火) 11:00~18:00 (金曜のみ~20:00)
水曜休 (12/27~1/4休館)
神戸ファッション美術館 (六甲ライナー「アイランドセンター」駅下車すぐ)
一般500円 小中高生・65歳以上250円 ☎078-858-0050

MUSIC

滝えり子 NEW YEAR'S CONCERT

我が心に唄えば

7年振りのコンサートは、滝えり子がかもとも思入れのある国際会館で、懐かしのスタンダードナンバーを、独特の深い歌声で聴かせる。「21世紀の幕開けの日曜の午後のひととき、ごゆっくりお楽しみ下さいませ」と、滝えり子自身も楽しみに待つ舞台である。田中克彦指揮、出演は北野タダオとアロージャズ・オーケストラ、ストリングス。

1/28(日)15:00開演

神戸国際会館こくさいホール(「三宮」駅南100m)

前売5000円 当日5500円

チケット/神戸アルパトロス ☎078-231-3300

チケットプレゼント



40年以上現役で歌い続ける
ジャズシンガー、滝えり子

MUSIC

~12月~

★チキンジョージ ☎078-392-0146

9(土) PONTA BOX、10(日) ROCK AROUND KOBE、12(火) LA-PPISCH、13(水) PUFFY、14(木) DIMENSION、15(金) BEAT CRUSADERS/BUMP OF CHICKEN、17(日) KOBE ROCKIN'BLUES NIGHT、18(月) POWER OF ROCK2000 FINAL、19(火) SONS OF BLUES、20(水) ~24(日) T-SQUARE、25(月) TimPan、26(火) スガシカオ、28(木) クニ河内とかれのともだちII、29(金) BARAKA、30(土) hot hip tramp online school

★ヒアジュリアン ☎078-391-8081

8(金) 鈴木華重子(p)、10(日) 辻本恵子(p)、11(月) 小笠原薫(vn) 清水道代(p)、13(水) 寺内智子(sp) 袖野亜希子(p)、14(木) 近藤美香(p)、15(金) 西本淳(sax)

濱長良美(p)、18(月) 李浩麗(sp) 大迫めぐみ(p)、21(木) 近藤美香(p)、22(金) 鈴木華重子(p)、23(土) 寺内智子(sp) 袖野亜希子(p)、25(月) 小笠原薫(vn) 清水道代(p)、27(水) 原公一郎(g)、西本淳(sax) 鈴木恵美(sax) 濱長良美(p)

★Holly's ☎078-251-5147

8(金) 奥田尚子(vo) & メーブルシロップ BAND、9(土) 長井美恵子(p) トリオ、14(木) 原田耕自(p) 森本良平(b) 後藤信夫(dr)、15(金) たなかりか(vo) 植田貴代(p)、16(土) 楠本なおこ(vo) 小泉ゆうこ(p) 奈良原裕一(b)、21(木) 荻田和貴男(g) トリオ、22(金) アロハサンタ ハワイアンナイト、23(土) EveRobin(尺八) RonMason(g) DaveBoyle(b)、24(日) 橋本尚子(vo) 他、28(木) まさ木まや(vo) 米森英毅(p)、29(金) 山口エミ(vo)

★T2楽屋 ☎0798-242-5888

9(土) プッツンエンドレスBand VS エミ&ヨシ、11(月) コウタロー-SuperSoul、12(火) 横井勝巳、13(水) KAJA&JAMMING、16(土)

となりどおし、17(日) TheSoulShakers、18(月) アクワボムVVSカンクウォーター、19(火) ロメル・アマード、27(水) Jun with 光太郎、29(金) 田中晴之/東ともみ/小林久人/島田和夫、31(日) カウントダウン

★イエローリボン ☎0798-34-2872

9(土) Fool's silver、10(日) Liverpool、15(金) 14周年記念ELVIS NIGHT、22(金) 45RPM、23(土) STAMPEDE X'masNIGHT、24(日) クリスマスダンスパーティー(HitParade9)

★萬屋宗兵衛 ☎078-332-1963

8(金) UP SWING JAZZ ORCHESTRA/神戸大学軽音楽部、10(日) 黒田卓也(tp) 朱恵仁(p) 中林薫平(b) 清水勇博(dr)、15(金) MAPLE LEAF SWING、17(日) FIVE SOUNDS、26(火) オノベッツ

★WACA ☎078-333-6768

9(土) 45RPM、15(金) KAJA、16(土) 天野SHO、19(火) チャーリー・コーセイ、23(土) MASH、30(土) BLIND DATE(ロメル・アマード&島田和夫)

TICKET PRESENT

<MUSIC>

★1/14「高木綾子フルートリサイタル」(神戸新聞松方ホール) ベア1組

★1/23「滝えり子ニューイヤーコンサート」(こくさいホール) ベア5組

<ART>

★神戸ファッション美術館

(ファッションウィング) ベア3組

<CINEMA>

★バルシネマしんこうえん

(1月末まで有効) 2名▽12/6~13「アメリカンヒストリーX」

▽12/14~20「戦争のはらわた」

「レザボア・ドッグス」▽12/21~28「ロック、ストック&トゥー・スモーキング・パレルズ」

「ブランケット&マクレーン」

★シネモザイク1~4

(1月末まで有効) 2名▽12/1~12/15「悪いことしましょ」

▽12/16~「シックス・デイ」

▽12/12/中旬「ホワット・ライズ・ビニーズ」

▽12/12/16~「ゴジラ2001」

▽12/12/9~「ダイナソー」

★ベレーネシネマ・カナートホール

(1月末まで有効) ベア5組▽12/9~22「顔」

▽12/12/16~「ゴジラVSメガギラス」

▽12/23~1/12「学校Ⅵ」

「シベリアの理髪師」▽1/13~「天国までの100マイル」

★西灘劇場

(1月末まで有効) ベア5組▽12/2~15「オール・アバウト・マイ・マザー」

「Born to be ワイルド」▽12/16~29「あの子を探して」

「バダック・砂漠の少年」▽12/30~1/12「チューブ・テイルズ」

「パプス」

●ハガキでFAXで①希望するチケット②氏名③郵便番号④住所⑤年齢⑥職業⑦電話番号⑧12月号でもしかなかった記事とその理由を明記して下さい(12/28必着)。

〒650-0011神戸市中央区下山手通2-13-3建創ビル4F

(FAX078-331-2795) 月刊神戸っ子「もだかる0012」編集室

MODE CULT'S VOICE

○カニ解禁です紅葉ですと

さわいでいたらもう12月。

クリスマスにバーゲンに、

四季ある国は忙しいですな。

10月号のご感想より。

●「有馬に広がる御所坊の世界」

近くて遠い有馬という感じがありました。あまりに近くてなかなか行くことがありませんでしたが、この企画は目からウロコ。たくさん楽しいところがあるんですね。北区・田中さん

●トアロードクラフトアートフェアに行きました。

「神戸っ子」さんのブースを探したのですが…。お気に入りのアーティストを見つけましたので、来年も出品したら良いなと思っています。福引きで「千代」のデザート無料のチラシが当たり、細い裏道を上っていくと、普通(?)の一軒家でビックリ。でも美味かったです。長田区・内山さん

○神戸っ子で出店、考えたことなかったですね。似顔絵とか陶芸品とか、先生方に習って来年からやりましょうか(本は?)。



夢舞台が新たな交流の場に 「淡路夢舞台創造祭」開催

淡路花博のメイン舞台であった「淡路夢舞台」は、人間の手で自然を回復させ、私たちに感動を与えてくれた。その夢の地が、新しい交流の舞台「環境創造ミュージアム」として再スタート。まずは淡路島の文化交流の舞台となつて、12月8日・10日、「淡路夢舞台創造祭」香り、さざ波の感動と表現」を開催する。

12月8日18時のオープニングには、台湾の先住民ピュマ族出身の歌姫・サミンガがその七色ボイスを披露。9日・10日には、現役最高齢94歳の舞踊家・大野一雄による公演「20世紀への鎮魂」癒し系の声をもち、ポップスとクラシック、ジャズ等の融合で独自の世界を歌うお

たか静流のライブコンサート、兵庫県芸術奨励賞を受賞した岩崎正裕書き下ろしによる2人芝居「ラスト・デイト」など、ジャンルを越えた芸術が夢舞台に集結。イベント期間中、夢舞台全体は、癒しの香りの演出で出迎えてくれるそう。

20世紀の終わりに、夢舞台とともに新しく生まれ変わった淡路島が、癒しと感動をプレゼントしてくれるだろう。

問い合わせ

淡路夢舞台創造祭実行委員会事務局
神戸市津名郡東浦町夢舞台1
0799・74・1065

21世紀をともに闘おう！ クラッシュJ.R.募集

ライオネス飛鳥&長与千草のプロレスラー・デュオのクラッシュ・ギャルズが今年5月に再結成し、クラッシュ2000としてスタート、次世代を担う女子プロレスラーを育成すべく「クラッシュJ.R.」プロジェクトに着手した。来年早々に新人オーディションを行う。彼女たちによって選ばれた合格者は、クラッシュJ.R.として、飛鳥&長とみずからの手で育成、指導される。21世紀のスターレスラーは、貴女かも知れない！

募集要項

応募資格/25歳以下の独身女性(在学者の場合、練習環境等相談) 格闘技・スポーツ経験者優遇
応募要項/必要事項と身長・体重・スポーツ歴を明記した履歴書 全身・上半身の水着写真と同封し左記まで
締め切り/12月末
応募先/〒154-0004 東京都世田谷区太子堂5・15・3コバモビル2B
ガイア・ジャパン 東京本部クラッシュJ.R.オーディション係
03・3795・2555



長与&飛鳥みずからが次世代レスラーを育成

2001年、今年こそ！阪神 タイガース応援ゴルフコンペ

阪神タイガースの2000年シーズンは、一度は首位に踊り出たものの、最下位に終わった。しかしタイガースには、日本一のファンの応援があるのだ。

新春早々の「がんばれ阪神タイガースコンペ2001」には、タイガースOBや現役選手が多数参加。ファンからの暖かい声援を受け、勢いをつけた選手たちは、このコンペが終わるとすぐにキャンプリンする。来シーズンに向けて、あなたも一振りが

いかが。



とても気さくな阪神OBの伊藤さん(左)と中西さん(右)

開催要項

とき/2001年1月11日(木)雨天決行
ところ/ジャパンレジャゴルフ倶楽部(三田西一Cより車で15分)
費用/23000円(税別・プレー費、カート費、バーティール費、会費含む)
定員/30組120名(定員になり次第締め切り)
申し込み/12月25日までに、FAXか郵送で左記まで
〒553-0003 大阪市福島区福島6・8・10クリスビル8F
06・6454・0039
FAX 06・6454・0048

ミセス宇都宮昌子の 「ミセスパール」



宇都宮さん(左)とお客さま

誕生日ありがとう運動

さよさんへの手紙

「コスモスの花がきれいですね。先日電車の中で、久しぶりにおかあさんに会いました。」

旅行がもつてくるので、とても楽しみにしてるって。よいお天気で、仲間のみなさんと楽しいことがいっぱいあるように祈ってますね。

さよさん、このごろ、作業着のほつれた所縫ったり、ボタンがとれた時など自分で付けているんですって……それ、だまってひとりで。おかあさん驚いたといいながら、とても嬉しそうでしたよ。そして「ごで教わったんでしょ」と不思議そうでした。でも、私は「やっぱいいね……さよさん、すごい!!」と感心するのといっしょに、心の中で拍手をしていました。

毎日のお仕事や、週に何回かのクラブ活動にも参加したり、たくさん仲間との生活の中であなた自身が喜びとったのよね。しっかりと成長しているあなた達のことを、嬉しい気持ちで思い浮かべていると、ふっと「ハンディキャップがある……」ということばはおかしい、と気がきました。もって考えてみますね。ありがとう。

—U

誕生日ありがとう運動本部

〒650-8790

神戸市中央区中町通4・2・11

村上ビルB1F

TEL&FAX 078・360・1257

朝起きたらすっきり足やせ!! 寝ている間にシートがドロドロ!!

女 性の悩みの一つ「下半身太り」の主な原因といわれているのが「むくみ」。そこでおすすめなのがこの「キュッキュシート」。夜寝る前に足の裏に貼るだけで、朝起きたらシートはドロドロ、でもむくみはすっきり。足の裏は、水分や脂肪の排泄器官である「汗腺」や「脂腺」が発達しているので、そこから体内の余分な水分や老廃物を吸い出してくれる。代謝の悪い人は、体内の水分がうまく排出されず重力によって下半身に集まってしまう。「キュッキュシート」の成分は樹液エキスを粉末にしたもので、地下から水を吸い上げて生きている樹木の力を人間の水分排出機能の活性化に役立てたもの。シートが吸収した成分は、あなた自身のカラダにあった余分な水分だということにきつと驚くはず!

キュッキュシート/
40枚入り定価8000円を
特別価格6500円



増量40枚入り定価8000円を特別価格6500円で提供。

■お問い合わせ/コウケンベーター 〒101-0031 東京都千代田区東神田2-4-12 KVTビル1F
0120-74-7473 FAX.03-5822-2230

神戸駅の南、HDC神戸内にある「ミセスパール」は、ちょっとユニークなパール店。神戸の地場産業といえば真珠。北村真珠へ入社した宇都宮昌子さんが、あこや真珠の加工部門に配属されて35年。特に、中国であこや真珠と淡水真珠の加工を担当。平成10年に退社を機に独立。海からあがった真珠原珠から製品になるまでの技術習得を生かした、独特のオリジナルデザインで作品をつくり、「ミセスパール」のブランド名でデビュー。

「第5回アニメーション神戸賞」が大盛況のうちに終了。11月12日には、「アニメーション神戸賞」

「第5回アニメーション神戸賞」
「世界のポケモン」や「アニメ草創期からの実績等」に授賞

■ミセスパール
営業時間/10:30~18:30
078-360-6600

ユ一。

作家が手作りで創作する現場で、話し合いながら楽しく選ぶのは女性にとって至福の喜びだ。

授賞式が行われた。

今年から新設された「アニメーション神戸作品賞・ネットワーク部門」は、ゲーム「ポケトモンスター金・銀」が受賞。ルールプレイングだけでなく、自分が集めたコレクションを友達と交換して楽しめるゲームは、今や全世界で大人気。公園でゲームする子供たちは、世界の友達とデータのやりとりをすることも可能なわけ、森首相の言う「IT革命の基本であるネットワークの夢を実現した21世紀型ゲームへの当然の授賞だった。

一方、特別賞は、「科学忍者隊ガッチャマン」「風の谷のナウシカ」等で、音響監督として長年活躍してきた斬波重治さんが受賞。「音響監督という仕事は裏方なので、このような受賞は恥ずかしいと思いますが」と斬波さん。音という面でさまざまなアニメを影から支えてきた功績がたたえられた。

「アニメーション神戸」が開始されてから5年間は、日本のアニメがいかにかすばらしいものが皆に認識された5年間。このイベント、賞を設立された神戸市はじめ、関係者やファンの皆さんにお礼を」と審査委員長で

「週間アスキー」編集長の福岡俊弘さん。

あの延原武春が小説になった

国内のバロック音楽演奏に先鞭をつけた「日本テレマン協会」の創設者・延原武春が、「小説・延原武春」ある指揮者へのオマージュ」として小説になった。

作家は中野順哉。関西学院大学文学部仏文科卒。在学中よりバロック音楽の専門誌「ゲオルク」の編集に参加し、現在編集長。そして日本テレマン協会トータルコーディネーター。チェンバリストで指揮者の中野振一郎の弟といえは、延原武春の身内のような立場で小説に仕立てるといふ離れわざをやつてのけた。あつぱれ!という読後感。小説もバロック仕立てのバツハ風。ぜひ一読を。



作者の中野順哉
東方出版(1800円+税)

KOBE POST

- ★金大中大統領のノーベル平和賞をお祝いする会が、12月7日(木)17時より新神戸オリエンタルホテルにて開催される。韓国から韓和甲民民主党最高委員、李姫鎮大統領令夫人御家族が出席の予定。大震災直後、神戸へ慰問に来られたこともある金大統領を、県民、市民、在日韓国人の人々とともに祝う集いとなりそう。
- ★アシックス(株)の鬼塚喜八郎会長が、PHIP研究所から「転んだら起きればいい」、致知社から「アシックス鬼塚喜八郎の経営指南」を上梓。また、漢陽大学の経営学の名譽博士号が贈られた。
- ★大正13年生まれの子年男、市野弘之陶芸家、笹山幸俊(神戸市長、中西勝画家、陳舜臣・作家、小泉正巳(元月刊神戸つ子)の5人が喜寿を迎えられ、12月19日(火)生田神社において「チュート郎の会」を開催。事務局/月刊神戸つ子内TEL078-3331-2246 FAX078-3331-2795
- ★芦屋市立博物館の松永精一郎氏が退任され、10月1日より新しく三浦清氏が着任された。
- ★ファッションコーディネーターの高野多美さんが、(株)大丸神戸店、京都店の任期を10月31日で終えられ、TAKANO OFFICEでスタート。西宮市甲陽園山王町1-88-42 TEL07998-713066
- ★(株)武田設計(武田明代表取締役)が自宅に事務所を移転。神戸市兵庫区馬場町1-3 TEL078-3667-6251
- ★パリトン歌手の三宅亮氏が10月3日御逝去。
- ★四宮神社の大山裕史宮司が10月27日御逝去。
- ★株式会社はの速水宣二社長の御母堂まつ子さんが11月7日御逝去。
- ★株ネービック富士の上本富士哉社長が11月24日御逝去。
- ★神戸ネオトロピカル協会のサンエー社長・山本ゆり子さんが11月26日御逝去。心より御冥福をお祈りいたします。

異端の薔薇

中谷 衣里

写真・後藤 洋治郎

夕方、岸子は新聞を取りにいく門までの道々、あの室田夫人の書いた地図が果たしてポストに入っているか、胸の動悸が高鳴るのを押さえることは難しいほど、興奮していた。ポストにあった。

その地図は、室田夫人の几帳面な性格通りの、はつきりとわかりやすい地図と、

「岸子様、

御一緒できなくてごめんなさいね。相手のお方には連絡しておきました。

あなたの事は、事細かく申し上げておきましたところ大変喜んでおいでになりました。何も御心配には及びません。とても温かい心の方で、広い心もおもちですから、どうぞ御安心くださいませ。

では、また、お手紙にて

室田律子」

と記してあった。

あくる日は、暗れたさわやかな風が頬をやわらかくするよう、岸子の気分も優れ、ハンドルも軽やかにエンジンが吹かし、地図の家へと急いだ。

驚いた事に、家から山の方へ5分とかからず走った、横道に入った坂の上にあった。

車の窓から見上げると、まるで17世紀のフランスのお城のように、聳えるように建っていた。

家からこんなに近くにこの家があることに、今まで少しも気付かなかったことが不思議でさえあった。

考えてみれば、坂の上の突き当たりまでは上がっていくことはなく、知らなかつたことが当然のようであつた。時也を連れての散歩はこの坂の上までは無理で、建っていることさえ知らなかつたことに納得している可笑しい岸子だつた。

今日は義母が地唄舞いのお稽古日にあたり、時也も一緒に連れてきていた。

お手伝いの貞子も休みの日と重なり、時也を連れて来ざるを得なかつたことに、また日を変えて来た方がよかつたことに気付いた。

その時、門についたテレビカメラに車の窓から覗く岸子の姿が見えたかのように、大きな門の扉がジーと言う静かな音とともに開いた。

岸子は一瞬怯んだように身構えた。

だが自然にゆるやかに車のペダルを踏んでいたのだつた。広い道が、まだ門から続き、玄関と思われる所まで車で5分ほど続いた。窓から見ると前庭と思われる所に老女といえ

ば失礼な、年を取られたご婦人とも表現できようか、女性が竹箒を持って庭を履くのが見えた。

じろりと車の方を振り返った。目が鋭く、岸子は慌てて黙礼をする格好になつていた。

老婦人も慌てるように腰をかかめているのに視線が合った。時也はよほど恐かつたのか、窓からすぐに座席へ身を翻して、もんどりうつようにお尻とともに座席に沈んだ。

「ママ、帰るんでしょう」

と前の座席に顔を覗かせて囁いていた。

「いいえ、ママはこのお家に御用があるのよ。いい子にしていね」

とエンジンを切ると同時に片手で時也の頭の髪に手を触れていた。

「僕、帰りたい」

「いい子にしてい、お願いよ。ご用はすぐにすみますからね」言葉が強かつたのか、時也は叱られていると勘違いしたようだった。

「ねえ」

また前と同じく強く言っていた。

興奮きみの岸子に時也は黙った。小さな時也の手を引いて、岸子は車から降りた。

もうすでに老紳士が、扉を開けて待っていた。岸子は4段ぐらいの階段を思わず踏み外して、踵を浮かせきみになる。鼻の上に脂汗が出るほど緊張しているのに気付いた。

紳士は穏かに黙礼した後、

「岸子様ですね。お待ち申し上げておりました」

「はい」

思わず時也の手を強く握っていた。驚いた時也が岸子を見上げた。岸子は作り笑いをし、時也を、いや自分自身に落ちつけと気合を入れているのが解つた。「どうぞ、こちらへ」

紳士は黒いタキシードを着て、まるでフランス映画の召使のように見えた。

「はい、恐れ入ります」

岸子自身も映画の女主人のように振舞っているのが、この雰囲気の中で生きているかのように、人形が糸に操られているようだった。

広い大理石の光る床を滑らぬように注意しつつ歩いていた。時でも母の異様な様子を呑み込まれたのか、岸子と同じ緊張をもって母の手をしっかりと握り緊めていた。

エレベーターの前を抜けるとそこは、まるでお城の中のように天井は高く、聳えるように上から光る丸いシャンデリアの玉3個が、今にも落ちそうにぶら下がっていた。

何故かその時、岸子は先日、時也のウルトラマンのビデオ



を借りに行った店で、時也の選ぶビデオの間に、横の棚に並んだマイケル・ダグラスとキヤサリン・ターナー主演の「ローザ家の戦争」という夫婦が殺し合うシーンで、シャンデリアにぶら下がる2人が体重の重さに引かれて、廻りながら落ちて行くシーンを思い

出していた。

こんな場面では、極度の緊張を強いられる病を持つ人間は、その場から関係のないことを頭を描きながら、緊張を解いていくすべを何故か身に付け(自分を守る方法の一つとして)目を反らしながら、ゆるやかにその場から逃れるのが常だった。通された部屋のテーブルの前に座ると同時に、黒い洋服に白いエプロンの中年の女性がお茶をもって出てきた。

こんな世界がまだ日本の、それも岸子の住む家の近くにあるとは、夢のまた夢の話のようでもあった。

時也は恐れと母の緊張した面持ちを感じたかのように、岸

子のお尻の後に身を縮めて丸くなって、かくれんぼをしているように顔を出して、今から何が始まるのか興味深げにきよるきよるとあたりを見回していた。

一時ほどして、今度はきちんとした背広を着た、前の老紳士より少し若い紳士が黙礼と同時に岸子の前に座った。

岸子は、次に何が起こるのか不安に顔を曇らせていた。すると、今度は中年の小奇麗な婦人がやってきたが、整いすぎた顔をしていて、好感の持てない冷たい表情に思えた。岸子の前に足を揃えて、別の紳士が立っていた。彼は自分の事を秘書の前中良と言った。

前中の横に寄り添うように座った女性は、魅力的な味のある声をしており、顔の冷たさとは正反対なのに少し驚いた。その女性の声にうっとり聞き惚れていると、自分は野村由紀子という名の秘書だと告げた。

岸子は何という場所に迷い込んでしまったのかと、思わず溜息を漏らした。すると由紀子という女性は、キッと岸子の顔を穴のあくほど見て、睨む表情に、岸子は思わず身震いするほど緊張が走った。

由紀子はスーツはエレウノの細身の物で、白いカッターシャツを着て、時計までもが上品な高価なものだった。

思わず岸子は、前に座る由紀子に対していろいろ想像を巡らし、こんな時に不謹慎と思いつつ、この女性がお酒に酔ったときなど、もう諦めかけられた男性に、酔った勢いで電話の力を借り、

「もう、すでに終わった2人だけれども、また逢ってみませんか。また、私はあなたのことを忘れることなど出来ないのですが、どうなの」

と電話口で囁いているのかしらと、岸子はいつもの癖で空気の張りつめたこんな時にも頭の片隅で空想して、独り楽しんでた。主人の拓也との間に繰り広げられた苦しい世界に、苦悩から少しでも早く逃れたいという気持ちの表われで、こういう癖が何時の間にかついていた。

岸子がそんなことを想像していると、急に野村はわざとらしく、そして大きく、

「えーん」

と咳払いを一つした。岸子は鳥肌が立つほどの寒さを体全体に感じた。

その場の嫌な雰囲気が消すごとく、前中は喋り始めた。

「こういった個人的な人間の集まりの中で、マドモアゼルは日々を送っておいでなのです」

そこまで喋ると、急に意味のない間合を置いた。

岸子は「マドモアゼル」という言葉に、このお屋敷の御主人は若い御婦人なのかと思った。「岸子様。ついていける自信はおありでしょう」

響く声で、前中は諭すように言った。

思わず反射的に、大きな声で、両手を膝に揃えて、

「はい」

と岸子は返事をしてしまった。

それで良いのか、悪いのかさえ、今の岸子は判断力を完全に失っていた。

しばらく、2度目に紹介された妙子と呼ばれるエプロン姿の女性が丁寧過ぎるきらいで、前に座る2人にお茶を持って現れた。

これで役者は全て揃った、と思うとほっとする間もなく、一番大切なことを忘れていたことに気付いた。それはこのお屋敷の主である「マドモアゼル」と呼ばれている女主人公が登場するはずである。

だが3人は、そのことには一切触れることなく、一向に女主人の登場場面は訪れなかった。

妙子と呼ばれる女性は、エプロンの裾を握り、

「岸子様は何を飲まれるでしょう」

冷やかに尋ねた。

岸子は思わず、「お水……を」

その言葉に3人の目が異様に光ったように見えたのは、岸子の思い過ぎだったのだろうか。水が岸子の前に置かれた。グラスは勿論、バカラの重いグラスで、水が美しいコップの水に泳いでいるように見えた。

揃った3人の中で、暗い沈黙は終わった。

「では、今日はこれにて」

岸子にとっては、思いもかけない返事で、前中と由紀子は言うなり立ち上がる姿勢に入っていた。

慌てたのは岸子だった。

何もかも、シナリオは終わったのか。

立ち上がった岸子は、ほんのわずかな時間だったが、とても長い時をすごしたように、疲れがどっと出ているのに初めて気付いた。

それほどの緊張を強いられる時が流れたのだ。ふと気付くと、息子の時也の姿が見えない。その辺りを探したが見当たらない。遠くまで目で追って見たが、何処にも姿はない。きつと幼子のこと、少しの時間にもじつと我慢できず厭きたのだろう。岸子でさえも今までに経験したことのないこの雰囲気、時也も退屈したのである。

時也の姿の見えないことに、岸子は冷や汗を覚えた。

立ち上がるためまいを感じる岸子。

追い討ちをかけるように、由紀子は、再び座り直し、何か早口に喋り出していた。

岸子も再び座り直したが、頭の中は時也のことでいっぱいだった。

由紀子の口元をしっかりと見てはいたが、何を言っているのか、全くといっていいほど理解していないのに、ただ頷いている岸子。

由紀子には変な癖があった。それは口元が動く、口と同様に喋る度に、両肩が右・左と、上がった下がったりするのが、岸子には嫌にはつきりと記憶に残った。

時也の姿を目にした時には、再び岸子は冷や汗を覚えていた。それは、一目で高価とわかる置物に、今にも手を触れようとする瞬間だった。

「それは駄目よ。お手で触っちゃ。駄目、時也」

思わず岸子は叫び声になっていた。

時也はなお、手を触れようとするので、

「見るだけ、見るだけよ。時也」

声をやや落としてみたが、目は時也を睨みつけている。

時也はやつと手を引つ込め、首だけ前に突き出して、可愛らしい仕草で見ていた。しばらくそのままの格好で時を過ごし、時也がその場を離れようとした時、秘書の前中が笑顔でその様子を眺めているのに、何か暖かい空気を岸子は感じた。「失礼いたしました」

うやうやしく一礼する岸子に、前中は、「いや、子供の仕草には、何かほつと心温まる思いがしますね」その言葉に救われた。岸子は胸をなでおろした。



それでも、まだ、上気した岸子は、玄関に立っている老紳士が前にいるのにも気付かず、「あの、お玄関はどちらでしょう」尋ねてしまった。

前中は、なお笑顔を崩さず、笑いのこもった言葉を返してきた。

「ああ、こちらですよ」

前中の指す手の方向に、老紳士が立っていることにはじめて気付く、岸子は顔を赤らめた。時也の手を引き歩み出すと、時也が急に立ち止まった。このお屋敷の品格を子供ながらに感じ、魅入られて夢中なのか、手を強く引き返してきたのだ。

岸子の家も拓也の実家も共に、高級住宅地に建てられ、ある程度の品の揃った家だった。義父は高名な画家の絵画、骨董品を収集していたが、このお屋敷にあるそれぞれのものは、岸子が今までに見たものではない品が多く揃っている。応接間には、本かテレビの、世界の美術品アワード見たことのあるものが多かった。

それは億に近いような高価なものばかりであると思われた。その億単位に近い高価な絵画が何枚も飾られ、テーブルの下に隠れるように敷かれている絨毯は、岸子にもわかるほど高価で繊細な模様のペルシャ絨毯で、思わずスリッパを履かねばならないとさえ思わせた。

また、花々におおわれた花瓶は、ガレリの、これも値段の全くわからないものが何本も並び、何とも表現の出来ない光沢を放っていた。

最も驚かされたものは、玄関のガレージの横の上がり口に、世界に十数個しかない、あの高名なロダンの作品の『考える人』がさり気なく置かれていたことだった。

このような環境の中では、普通の人々は感心し、素晴らしいものが真近に見られることに幸せを感じるであろう。だが、岸子は違った。

心の病のせいか、それらの感情の中にもっとも恐ろしいこの病の特長である、肩が凝るという表現ではまとまりのつかない、重い石がこれでもかと、どっかりと両肩に乗っているような強い疲れを感じていた。

いやがる時也の手を無理に引っ張り、連れ去ろうとする岸子に、老紳士は冷やかに微笑する。それとは反対に、何と

も言えない恥ずかしさと恐ろしさで思考する岸子に、もう一つ、それ以上に嫌な射るような目をした妙子がいた。エプロンのポケットの上に両手を乗せ、睨みに近い目は、まるで悪魔の瞳のように見えた。

岸子の感情は、移り変わる気分の中で、何かゲームの中にいる主人公が岸子ではないかとさえ思われた。

岸子はまた、病のため要らぬ心配が始まり、さまざまなことが心の中で駆け回った。

するどい目の妙子の前を通りすぎ、エレベーターの前まで来た時、我に返る岸子。

はじめてそこで、時也の目を見ることができ、ほつとして、また脇の下を流れる一筋の汗を感じていた。

車を止めてある所に、時也の手を引き歩いた。途中に、長い首を持つて黒光りするドーベルマンが6匹、激しく吼えていた。

お屋敷に足を入れた時には、犬の声も、時也も全て忘れていたことに岸子ははじめて気付いた。

きつと頭の中が真っ白になっていたのであろうか。吼える6匹のドーベルマンの横に、まるでミイラのごとく細い目をして、薄気味悪く年を重ねた、背の異常に高い男が時也の顔を見ていた。

彼はお化け屋敷の人を驚かせる人形のように、時也は怯えて、岸子の手を握りなおした。堅く熱を持って。

6匹のドーベルマンと同じく、男の肌は黒く光っていた。まるで7匹の犬が吼えているような錯覚さえ岸子は覚えた。

吼える6匹の犬、見据えた恐ろしい目の男。時也は車の所に来て座席に座ることさえ出来ぬほど怯え、座席の下にもぐり込むように丸くなって隠れて泣いた。

手が震え、なかなか車のキーが差し込めず、また、その手でキーを回す力がないほどに動揺する岸子。

やつと車が走り出すと同時に、岸子は時也の存在にあらためて気付く。

帰りの道の風景は、来るときとはまるで距離までも違っている。時也の姿さえ、顔までも違つて瞳の奥に映る。この不思議な思いは、まるで迷路に迷い込んだようだった。

帰宅した岸子は、キッチンで心安まる香りのペパーミントのハーブティーを飲んだ。それでも部屋が廻つて見えていた。その時、電話のベルが奥で鳴っていたが、手に取ることを

え出来なかった。

そのベルの音がこれから岸子の身に起こる変化のベルだとは、気づきもしない。そのまま時の部屋で、時也の遊ぶ傍らで深い眠りに落ち込んでいく岸子。それは奈落の眠りときえ思えた。

眠りの中で、奈落の棲み人、あの拓也の姿を見ていた。

岸子が見たこともない女性に会うのである。

そしてその女性が、高笑いをして拓也と手をつないで歩いているのだった。

岸子が、

「行かないで！」

と叫んでいた。二人は岸子を振り返り、笑い声を上げながら去って行く。

はつと目を覚ました岸子は、寝汗をびっしょりとかいている。それさえ気付かぬほど疲れ切っていた。

このようなことは岸子にとって生まれて初めての経験だった。

今までは、何かあるとすぐに医者へ駆け込んでいた。時也が小さい怪我をして、医者へ、

「これほどのことで、来ることはありません」

と言ったとしても、

「先生何故なのでしょう。こんなに大きな怪我をしているのに」

と首を傾げるのだった。当事者の時也は、もうすでにけろりとしているのである。

それから三日も経たずして、ある夜に、お手伝いの貞子が、

「若奥様、前中様という方からお電話です」

その声に震えあがる岸子。

「岸子様ですね」

電話口から聞こえる声は、確かにあの笑顔の前中の声である。

「用件は、マドモアゼルが明日にでもお会いしたいと申されていること」でございます」

岸子は、

「少し時間を頂けませんでしょうか。考えてみたいと思ってありますので」

「ええ、いつでも結構ですよ。お気が向かれました時でございます。私前中まで連絡頂ければ幸いに存じます」

それだけであっさり電話は切られた。

やはり、あの「マドモアゼル」が……室田夫人が言ってお

られた心の広いお方なのか、きつと「マドモアゼル」と呼ばれるには、若い女性なのだろう。どんなお方かと岸子は思考を巡らしてみた。

逢う心はあったが、もう心とは裏腹に、すでに身体は次の行動に移っていた。

その夜のこと、睡眠誘導剤と安定剤、そして咳薬など何種類もの薬を無意識に口の中に流し込み、まるで酒に酔ったように熱を持った身体をベッドに滑りこませ眠り込んでいた。

見たこともないマドモアゼルという女性の影を追いかけている自分が何時の間にかいた。

意識のかすか向こうに、ぼんやりとはあるが、岸子の作り上げたマドモアゼルがいて、岸子はその幻影に独り善がりの想いに酔っていた。夢の中のマドモアゼルは年老いた女

なのか、中年の女、または若い女性なのか解らず夢の中でさまよう岸子がいた。

けだるい朝を迎え、時也を幼稚園に送ると、廻りの御夫人達の誘いも呈よく断り、足早に家路へと急いだ。

早く前中に「連絡を」と思いつつ、思いとは反対に電話をかける勇気が持てない、消極的な岸子。

岸子は情けないとは思いつつ、数日を過ごしている自分自身と向き合っていた。

そうして無駄に時間を過している間に、義父や父、そして貞子の留守を見計らいつつも、まだ決心がつかずいらだつ岸子。勇気をふりしぼり岸子は、朝も早くから念入りに肌の手入れをし、ドレッサーの前でどの洋服を着ようかと迷い、マドモアゼルに会う準備に取りかかった。

義母には、
「今日の予定は何かおありなの、岸子さん」と聞かれ、

「いいえ別に、お昼からお友達のところにならねえ顔を現に見に行こうかと考えています。長い間ご無沙汰申し上げているものですから」

「そうなの。予定はそれだけ」

「はい。今のところは……体調が悪く、あまり外出もしていません。今のご心配の手紙をいただいておりますので」

「そうね。もう体重も戻ってきたことだし、女同士のお喋りもきつと気分転換になるでしょうね」

「ええ」

岸子とはつきに、ごく親しいお友達といったが、これから逢おうとしている影さえ、また想像もままならぬ女性に逢うに行くとは、義母の知る由もなく急に不安になった。

「せいぜいおしゃべりして行くことですね」

「ええ、そうしたいと思っております」

「いいよ、別に。あなたは何もせずともいいんです。今日一日、楽しい、明るい日をすごすか、それだけ考えていけば、心の病も知らぬうちに治つてしまふものなのよ」

「そんなに簡単にいくでしょうか」

「それは時間ばかりですよ。でも心の傾きは、知らず知らず流れて変わるものと思えますけどね……」

「そうですね。そう思い、楽しい時間を作る努力をいたします」

「そう、その考えで一日を送ればいいんじゃないかしら」

「ありがとうございます。ほんとうに私の勝手ばかり申してお食事を買物も、お掃除までもお義母様と貞子さんに押し付けてしまい、とても気になっているのですが駄目ですね。私つて」

「あら、そんなことなくつてよ。人生つて思うほど短くも長くもないわ。こんな時間も神様が与えてくださった時間だと感謝して、甘えられる時は甘えていけばいいのよ。私はそう思うのですけどね」

「ほんとうにお義母様には心から感謝しています」

「何を言うの、もとはと言えは拓也のしでかしたことでしょ。う、何も知らないあなたをこれだけ傷つけた男の母親でもの。これでももつと、甘えてほしいぐらいい思っていますよ。お父様も同じ気持ちでいらつしやると思っています」

「ありがとうございます」

岸子は、最後の言葉を口にするときには、思わず涙ぐんでいた。

（つづく）



中谷衣里（なかつたえり）
神戸市生まれ。神戸のトアロードと北野町に「サント・ノール」フランス料理と音楽の店を永年営業する。阪神大震災に遭い一時期声を失う。ペンネームにて雑誌や新聞のコラム等に発表していたが、本格的に作家として執筆活動に入る。